

二〇二〇年度 聖ドミニコ学園中学校入学試験（第二回）

# 国語 50分

◎ 次の注意事項（しごとう）を読んでください。

- 1 試験開始のチャイムが鳴るまで開いてはいけません。
- 2 問題は全部で9ページあります。
- 3 解答用紙は問題用紙にはさんであります。
- 4 解答用紙に受験番号、氏名を書いてください。
- 5 答えはすべて解答用紙に書いてください。
- 6 字数は、句読点（くつうてん）や「」など記号もすべて一字に数えます。

【一】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

私たちは「今、ここ」以外では生きられません。私たちはもちろん未来にはまだ存在していませんし、**X**は存在するわけではなく、もはや痕跡こんせきが現在残っているだけです。私たち自身が同時にどこかほかの場所にも存在しているわけではなく、私たちがいる場所は全①ウチユウの中でただの1か所です。

ですから、**A** 何もしないのであれば、私たちの「思い」はどこにも届きません。そして、永**Y**に届かないままです。ただ「思い」は文字通りの「思い」として、私たちの意識の中にしまいこまれているにすぎないのです。しかし、文章にするとどうでしょうか。私たちは言葉の②タスケを借りて、今の、ここでの「思い」を何かの「文章」として表現することができます。話としての音声ならそれを直接耳にする人の範囲はんいにしか聞こえないのですが、書いた言葉なら、それは「文字」として物理的に残ります。文字で書かれた文章として具現化した「思い」は、「今、ここ」からはばたいて、別の場所、私たちの「思い」を再現してくれます。

すなわち、「今、ここ」でしか存在できなかった「思い」は、文章として書かれ、読む人を③得ることで、「今、ここ」を離はなれて、**B**新たに生き始めるのです。文章に書かれたものはいろいろんな手段を使って、容易に再現・移動できます。文章が読者に巡めぐり会えたなら、そのとき、私たちがそれを書いたときの「今、ここ」は読者の「今、ここ」として再現される、とも言えるでしょう。手紙のように特定の読者の場合もあるでしょう。**C**不特定の多くの読者に届くこともあります。また、非常に遠くにいる読者に届くことも考えら

れます。時間もいろいろです。インターネットなどでほぼ瞬時しゆんじに届くこともありすが、何年も、場合によっては何十年、何百年以上の年月を経て届くということもあるはずで

す。このように考えると、文章を書くということは、**1**奇跡きせきのようになすべしらしいことだと思えてきますね。

**2**、文章にはその文章なりのある種の「力」があります。ある文章を読むことによって、人がその生き方を変えるということもあります。生きる④キボウを与える文章も、幸せな思いにする文章もあるでしょう。世の中を変えるような影響えいぎょう力をもった文章もあります。もっとも、人を怒おこらせる文章も、悲しませる文章もあります。書かれた「思い」や情報は、「読まれる」ことによって、**D**様々な作用を及およぼすのです。

⑤ハウリツも、契約書けいやくしょも、ラブレターも、新聞記事も、小説も、⑥カシも、実験報告書も、依頼書いらいしょも、すべて、「ひとまとまりのもの」として書かれたもの、**3**文章です。世の中をその⑦コンテンツにおいて動かしているものは文章である、とさえ言えるのかもしれない。

しかし、文章を書かなければならないのにうまく書けない、というとき、私たちは大変厄介やつかいな思いをします。考えはまとまらない。字の書き方もなんだかわからなくなってくる。文はごちゃごちゃになる。なんとか書いたとしても、何が言いたいのかわかってもらえない。馬鹿ばかにされることもある。⑧挙句あげくの果てには、自分の⑨意図いどうを全く⑩ゴカイして受け取られ、相手も自分もキズついてしまう。文章を書くことは、厄介やつかいなことでもあるのです。

**4**、どうすればいいのでしょうか。——そこで、注目したい

のが「言葉」です。文章を成り立たせているのは日本語。言葉には、文字、語（ボキャブラリー）、文としての組み立て、段落の構成、といったそれなりの仕組みがあります。この仕組みを具体的に知識としてまとめ、また、その原理のようなものを考えることで、文章の基本的な「書き方」を身につけていくことができます。

さらに、文章にはいろいろな種類がありますが、文章の種類による「書き方」についても「言葉」から考えることができます。報告文、論説文、文学的な表現、そして、手紙、というように、様々な文章の種類に応じて、書き方は違<sup>ちが</sup>ってきます。そうした違<sup>ちが</sup>いを具体的な「言葉」から考えてみるのです。いったん **F** 書き方がわかれば、**考えも一段と深まる**ものです。書こうとする内容は、「言葉」として具体化され、秩序<sup>ちつじょ</sup>づけられることで、より明確に整理できたり、根拠<sup>こんきょ</sup>づけられたりするからです。私たちは「言葉」を大切にしていることで、文章を書く力を身につけるとともに、考える力をも高めしていくことができるのです。

(森山卓郎『日本語の〈書き〉方』)

問一 線①「ウチュウ」、②「タス(け)」、③「得(る)」、④「キボウ」、⑤「ホウリツ」、⑥「カシ」、⑦「コンテイ」、⑧「意図」、⑨「ゴカイ」、⑩「キズ」のカタカナは漢字に直し、漢字は読み方をひらがなで答えなさい。

問二 **X**に入る適当な言葉を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 世界 イ 天国 ウ 過去 エ 運命 オ 意識

問三 **Y**に入る適当な漢字1字を答えなさい。

問四 **1** **4**に入る適当な言葉を次から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア しかし イ さらに ウ では  
エ すなわち オ まるで

問五 線A「何もしないのであれば、私たちの『思い』はどこにも届きません」とありますが、「思い」を届けるためにどうすることを筆者はすすめていますか。「**□**こと」となるように、**□**に入る言葉を本文から5字でぬき出しなさい。

問六 線B「新たに生き始める」とはどういうことですか。その説明として適当なものを次から**二**つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分にとっての「今、ここ」にだけ存在した「思い」が、文章になると読者にとっての「今、ここ」へ届くということ。  
イ 言葉の力を借りることで、「今、ここ」に存在しなかった「思い」に気付いて、自分自身への理解が深まるということ。  
ウ 自分の心の中にしか存在していなかった「思い」が、文章として書かれると「文字」として物理的に残るということ。  
エ 自分自身は同時にほかの場所に存在することはできないが、文章は別の場所まで「思い」を伝えてくれるということ。

問七 — 線C「不特定の多くの読者に届く」とありますが、それはどのような場合ですか。例として適当なものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 小説や論文として世の中に発表する場合。
- イ 遠方の祖父母へ手紙を書いて届ける場合。
- ウ インターネットを利用して公表する場合。
- エ 交換日記を友人たちと回し読みする場合。
- オ 契約書を書いて契約相手と交換する場合。

問八 — 線D「様々な作用を及ぼす」とありますが、この形式段落の中ではいくつの「作用」が紹介されていますか。漢数字(一、二、三…)で答えなさい。

問九 — 線E「挙句の果て」の意味として適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 最悪
- イ 最高
- ウ 結局
- エ 難局

問十 — 線F「書き方がわかれば、考えも一段と深まる」について、

(1)文章の「書き方」について説明した次の文章の I、II に入る言葉を本文からそれぞれ3字以内でぬき出しなさい。

文章の「書き方」を身につけるためには、文の組み立てや段落の構成といった、I を知ることが必要だ。また、報告文や論説文など文章の II によって「書き方」は違ってくる。

(2)「書き方がわかれば、考えも一段と深まる」のはなぜですか。理由が書かれたところを本文から60字以内でぬき出し、最初と最後の4字をそれぞれ答えなさい。(なお、本文の一行は約30字です)

【二】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

《二〇までのあらすじ》十一歳の女の子「みれ」は、学校の前で待っていた「千ちゃん」と買い物に行くことになった。作家の千ちゃんは、みれのお母さん(聡美)の妹で、時折、死んだおじいちゃんのまねをしてみせる。みれは、自分が学校のテストを白紙で出した理由を千ちゃんが探りに来たのだと考え、いらいらして思わず千ちゃんをつきとばしてしまふ。千ちゃんは意識を失って、病院に運ばれた。

かわいくて、かしくくて、いい子。それがわたしだ。みれは漢字で「美麗」と書く。そんな名前をちょうだいしたわたしは、落ちこぼれることなど許されない。テストで九十点をとってもほめられない。それが当然だし、むしろなぜ百点じゃないのかと質問される。ぶくぶく太つてもいけないし、きたない言葉もつかっちゃいけない。

お姫さまは、ひとりでした。お城には王さまも女王さまもいませんが、やっぱりひとりでした。お姫さまは、いつも、いつも、ひとりでした。

(中略)

千ちゃん。小さな声で、呼んでみる。白いベッドで眠っている千ちゃんのまつげは長い。こうして見ると、千ちゃんはお母さんによく似ていた。ふしぎだ。普段はまったく似て見えないし、他の人たちも口をそろえて「聡美ちゃんは美人やけど、千ちゃんは……まあ、ねえ」と言うのに。

お姫さまは、ひとりでした。A どうしてだか、『はこぶね』を思い出した。

『はこぶね』というのは、わたしが九歳の頃に書いたお話だ。おこづかいで買ったノートに、1 書いていた。

そのお話は、算数の授業中にとつぜんわたしの頭の中に舞いおりてきた。

舞いおりた物語を、① ヒミツの宝物みたいに時々手にとつてこっそり眺めていた。けれどもある日、これを書いてみようと思いついた。

大雨が降って、大洪水になって、お城の部屋の② マドを開けて寝ていたお姫さまの部屋にも雨がどんどん入ってきて、ベッドが水に浮く。そういうお話だった。

『はこぶね』を書いているあいだ、すぐたのしかった。

なんでわたしこんなことしてるんやろ、とよく思う。学校で勉強していても、家でピアノの練習をしていても。劇の役を演じているような、不自然な感じがする。

でもお話を考えているときやノートに向かっているときだけは、② そんなふうを感じなかった。

誰かに読ませる気はなかった。もし読ませるとしても、おしまいまで書いてからだと思っていた。

それなのに、引き出しの奥にしまっておいたノートを、お母さんが勝手に引っぱりだして読んでしまった。

「勉強してるふりして、こんなもの書いてたの？」  
とがめるような③ 口調だった。

「みれば、小説を書く人になりたいの？」

「わからへん、そんなん、まだ」

勝手に読まれたことも恥ずかしかったし、それになによりお母さんに「X」と言われたのが、すぐくみじめだった。わたしが夢中で書いていたのは「X」と呼ばれるようなものだったんだ。

「千みたいたいなの？」

お母さんはそうも言った。

「おばあちゃんが知ったら、なんて言うやろね」

ちがう。必死で首を振った。でもなにがどう「ちがう」のか、うまく説明できなかった。千ちゃんみたいになりたいとか、そういうんじゃない。ただわたしは。

必死で説明しようとしたけど、あまり意味はなかった。だってお母さんは、わたしの話なんてろくに聞いていなかったから。

お母さんは③ 泣きながら、ノートをびりびりに④ ヤブきはじめた。

「こういうので一流になれるのは、特別な才能のある人だけなんや。千を見なさい。あんなふうになりたいの？ デビューできまし

たつて言うけど、ただそれだけやんか。あの子、お⑤勤めしてた頃より生活苦しいのよ。みれ、千のファンだつて人に会つたことある？私はないよ。一回もない。そんなみじめな人生がいいの？ みれは「

B だから『はこぶね』の続きは、書いていない。

目を⑥覚まさない千ちゃんに、ねえ千ちゃん、と呼びかけたら、また新たな涙があふれてきた。

おばあちゃんはまた戻つてこない。お母さんが電話に出ないことで、さぞいらいらしているだろう。

すこし前から、お母さんは誰の電話にも出られない。数か月前に突然、そうなった。それを知りながら、わざとみたいに電話をかけるおばあちゃんは、こわい人だ。あらためてそう感じる。

お母さんは今、電車に乗ることすらできなくなっている。スパーやコンビニに行くことも。

無理にそうしようとする、身体が震え、涙が止まらないのだ。会社も辞めてしまった。最近、日中はたいいてい、寝室で横になっている。

お父さんは「すこし休めばよくなる」と、風邪かなにかのように言った。なんとかなるよ、と。その態度は、**4**かまえているというよりは、深く考えることを拒否している、というふうに見える。

おばあちゃん、そんなふうになるのは心が弱いからだと言った。「なんでそんなふうになってしもたん、情けないなあ」とも言った。子どもまで産んだ女がそんなことになるなんて恥ずかしい、母親でしょ！ しっかりしなさい。そう言われ続けて、お母さんの体調

は**5**悪くなった。

甘えやろ、結局。そう吐き捨てて、それから「みれは違うよなあ」

とやさしい声で言った。期待を裏切つたりする子じゃないよなあ、と。

みれはいい子。かしこい子。できる子。期待を裏切らない子。おばあちゃんの期待を裏切つたお母さんは切り捨てられた。

おばあちゃんは、ほめて育てる主義。たしかに、わたしはたくさほめられてきた。いい子。できる子。

でもそれは同時に、脅迫でもあった。C いい子でなければ、できる子でなければ、愛してもらえなくなる。

だから、いい子でなくなるうとした。

**Y** お母さんのその質問は、じつはけっこう、いいところをついている。だつて、千ちゃんは自由だ。

(中略)

「なあ、みれ」

突然、千ちゃんが**7**ヒクイ声を出した。

「おじいちゃんじゃよ。お前が生まれた時、わしは押づ取り刀で産婦人科に飛んでいったんじや。お前はちいさな身体を震わせ、真っ赤になつて泣いておつた。聡美の赤ん坊の頃にも千の赤ん坊の頃にもまつたく似ておらなんだ。だからお前は、聡美とも千とも違う人生を**8**歩めるはずなんじやよ……」

またおじいちゃんが乗り移つたらしい。

「おじいちゃんは、そんな昔話みたいな喋りかたしてへんかったし。まじめに喋られへんの？」

「……でも、今言つたことはぜんぶ、ほんとの気持ち。みれが生まれて、わたしはうれしかった。この子が素晴らしい人生を歩めますようにって思つた。きつとみんな同じ気持ちやつたはず」

でも、自分にとってどういのが素晴らしい人生か、その判断を他人に委ねたらあかんねん。わかる？ と千ちゃんがわたしの目をのぞきこむ。

「……今日会いにきたのは、聡美ちゃんから話を聞いたから。それだけ。聡美ちゃん、心配してたし。もちろんわたしも」

「お母さんが？」

自分のことで精いっぱいだと思っていたお母さんが、わたしのことを気にかけてくれていた。

「そう。みれの未来も、心も身体も時間も全部、自分のもの。他人の期待に応えるために生まれてきたわけやない。他人に渡したらあかん」

「いい子」なんてならなくていいんじゃないよ。またおじいちゃんが降りてきてしまったらしい D 千ちゃんの手を、ぎゅつと握る。

「わたしの人生はわたしのもの。⑩ ムネをはってみれがそう言えるんやったら、もうそれだけでじゅうぶん。それ以外のことはたぶんあとからついてくるから、だいじょうぶ」

ひとりぼっちで心細くて、だけどお姫さまは勇気を出して、ゆつくりと漕ぎ出して行きました。海は暗くて広くてこわいです。でも見てみたかったです。この海を渡った、その先にあるものを。

E 家に帰ったら、『はこぶね』をまた書こう。だってあのお話はきつと、わたしに書かれることを待っているから。

(寺地はるな『夜が暗いとはかぎらない』)

問一 線①「ヒミツ」、②「マド」、③「口調」、④「ヤブ(き)」、

⑤「勤(め)」、⑥「覚(まさない)」、⑦「ヒク(い)」、⑧「歩(める)」、⑨「委(ね)」、⑩「ムネ」のカタカナは漢字に直し、漢字は読み方をひらがなで答えなさい。

問二

1 5 に入る適当な言葉を次から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア ぜんぜん イ ますます ウ ぼろぼろ  
エ どっしり オ こっそり

問三

線 A 「どうしてだか、『はこぶね』を思い出した」とありますが、「思い出した」理由として適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 千ちゃんが目覚めないのは、お母さんに『はこぶね』を勝手に読まれた時と同じくらい嫌なことだったから。

イ 家族みんなから冷たくされる千ちゃんは、『はこぶね』の中のお姫さまのようにかわいそうだと思ったから。  
誰にも本音を理解してもらえない自分は、『はこぶね』の中のお姫さまのように一人ぼっちだと思ったから。

エ 何年間も忘れていたが、『はこぶね』を書いていると悲しい気持ちも忘れてしまうくらい大好きだったから。

オ 『はこぶね』の中のお姫さまは王さまや女王さまに守られているので、自分よりずっと幸せだと感じたから。



問九

——線D「千ちゃんの手を、ぎゅっと握る」という表現から、みれのどのような気持ちを読み取れますか。適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア みれの気持ちに気づいて心配し元気づけてくれている千ちゃんの優しさに、感謝する気持ち。

イ お母さんが自分もつらいのにみれを心配してくれていたと知って、申しわけなく思う気持ち。

ウ 大けがをしているのにおじいちゃんのみねをしておどける千ちゃんを見て、心配する気持ち。

エ いつもみれの味方をして優しくしてくれたおじいちゃんを思い出し、なつかしく思う気持ち。

オ みれの気持ちを知らないのに勝手なことばかり言う千ちゃんの言葉に、いらいらする気持ち。

問十

——線E「家に帰ったら、『はこぶね』をまた書こう」とありますが、みれの気持ちは何をきっかけにどのように変化したのですか。また、みれの書くお話の続きはどのようなものになるでしょうか。あなたの考えを100字以内で説明しなさい。

